

「ドイツ学生派遣プログラム参加報告書」

京都大学文学研究科修士1年 吉田絵弥

私は学部生の頃からドイツの社会学者について勉強しており、修士課程以降の具体的な研究テーマのフィールドの一つとしてドイツを考えている。具体的なテーマとは、例えば日本と同様にドイツも直面している少子高齢化という深刻な社会状況と、特に介護分野での労働力不足と担い手確保という両国の（そして他の国々にも共通する）喫緊の課題である。ドイツは介護政策の先進国であり、また担い手確保のための外国人労働者の受け入れも日本よりはるかに積極的に行っている。日本でも2008年以降の経済連携協定（EPA）により東南アジア諸国から看護師・介護福祉士候補者の来日が始まっているが、その政策は未だ途上である。その意味で、日本がドイツから学ぶべきことは多い。しかし、日本で得られる情報や経験は限られている。私はまた、将来的にドイツへの長期留学も視野に入れており、今後の研究のために一度ドイツに行く必要性を感じていた。

プログラムは経済分室のものであったため、訪問先は経済学系であることが多かった。私の専門は社会学であるが、しかし経済は社会の主たる領域の一つであり、経済の理解なしには社会を理解することは難しい。経済学を専門とする先生方や学生と各地をまわり、SMA Solar Technology AG（太陽光発電に関する会社）、Hessen州の政府機関やドイツ銀行へ訪問することは勉強になった。今回は特に再生可能エネルギーの活用等エネルギー問題に焦点があてられていたが、例えば再生可能エネルギーや原発に関するドイツと日本の政策の違いは、社会的にも興味深いものであった。

また、訪問先として、今回 Heidelberg の介護施設への訪問を自分でアレンジした。インターネットで見つけた施設10箇所以上にメールで問い合わせを行ったが、返信をいただいたのは今回訪問させていただいた施設だけであった。また、問い合わせをしたすべての施設のホームページはドイツ語で書かれており、ドイツ語習得の必要性和同時に、海外でのフィールドワークの難しさを実感した。施設の方は大変よくしてくださり、訪問の際は、施設見学と多くの質問に快く答えてくださった。介護分野での労働力が不足しているドイツでは、外国人労働者の活用が進んでおり、このことについて実際に現場の方からお話を聞かせていただくことができたのは、今後の研究に有益であった。本やインターネットでは調べることができなかった情報や知識を得ることができた。

ドイツに滞在する中でも、複数の発見をすることができた。例えば Frankfurt で大型スーパーマーケットに立ち寄った際、英語もドイツ語もできないというスペイン人の従業員と出会った。また、Frankfurt のある地域にはドイツ人は全然おらず、移民と思われる人々ばかりであった。ドイツは移民国家だということを実感した。

今回のドイツ訪問の主な目的の一つであった Heidelberg 大学でのワークショップへの参加もよい経験となった。日本における少子高齢化の状況、少子高齢化に起因する問題の一つである介護分野での労働力の不足、その対策としての外国人労働者の受け入れというテーマで発表を行った。英語でのプレゼンテーションはそれ自体よい勉強になったし、何よりこれはドイツも含め多くの国が直面している課題である。ドイツ、中国や香港など多くの国の学生とこの課題について議論をすることは有意義であったし、例えば日本はどうして中国人の介護人材を活用しないのかといった質問を受けるなど、新たな視点からこの問題について考えることができるようになり勉強になった。

全体を通して最も悔しく思ったのが、自分の英語の運用能力である。特にアカデミックな複雑な事柄を適確に説明するのに問題を抱えていることを、特にワークショップ、学生交流、そして介護施設訪問の際に痛感した。しかし、以前（例えば同年夏の海外でのワークショップ）に比べると上達しているし、今回のプログラムの使用言語は基本的に英語で、また留学生の参加が中心のため京都大学の先生・学生同士との会話も英語だったこともあり、英語力は確実に向上したと思う。私にとって英語は必要不可欠なツールであり、今後も勉強を続けていくつもりである。

私はドイツを今後の研究のフィールドの一つと考えており、ドイツを実際に訪問する必要があった。そして、本プログラムは今後の研究に資するものとなった。このような機会をいただけたことを大変感謝している。